

# 法然の末法観について

森 本 善 隆

末法の言説というものは、時代に結びつくものではなく、人間存在そのものに結びつくものである。即ち歴史的興存としての人間が苦悩を持ち、課題を背負っているそのことこそ、末法の意味するところであらうなくてはならない。鎌倉時代は我が仏教史上に於いて、正に第二次革命の時代である。その最も深刻にして、最も大なる新機運動勃興の因は末法思想であつた。鎌倉時代に至つて、新泉派の勃興、輸入、旧仏教の復興がなされ、その間、幾多の新義を生じ、新信仰運動が起り、いわば空前の重新的活動を見たのであるが、此の現れたる新機運動の興隆、結成たる新泉派の誕生にはみな共通の思想的背景として、いわゆる末法思想があつたのである。

鎌倉時代の各派の諸祖に於てはみな何等かの形に於て、當時にほうふつとして渡つたこの思想を背景として、此世を内憂にしていないう祖聖はないのであつて、むしろ時代苦悩としての末法到来の思想、もしくは深刻きやまゐる末法時代観そのものこそ、彼等諸聖出現の契機であつたのである。如何にして末法を超越するかという事がたとえ自覚的でなくても人々に離れぬ共通の問題であつたのである。諸聖に於てはその末法観又は末法時代観は必ずしもみな一枚ではなく、否その末法思想に対する態度、末法の時と根柢に対する観察はあらずから異つていたのであり、又これを如何に処すべきかに於てもみな異つてあり、その間対立、衝突をしたり又衝突

の中に互に調和して共通する處もあつて、複雑な波紋をえがいたのである。

此の末法なる思想は我が浄土教の発展に大なる影響を与へたのであつて、日本に於ける浄土教の先驅者たる恵心僧都もすでに寛和元年に往生要集を著し、その開卷第一に

夫往生極樂之教行彌世末代之目足也（浄土全十五ノ三七）

と述べている故に末代彌世に於ては往生極樂の教行こそ最勝の法であると浄土往生を奨励しているのである。この恵心僧都の教を継いだりか、教元祖法然上人であつた。

法然は日本仏教史上、古代的なものから中世的なものに、移り行く分水嶺に於て考へられねばならない存在であらう。法然こそ史的な転換期に立つて、宗教の新しい形態を生み出したとする先驅者であり、宗教改革者であつた。即ち彼は古代の天台、真言から完全に独立した新宗教を、しかも平安末期の社会不安、人間存在の危機に直面して、浄土思想の伝統の中から生み出したのである。この時代に於ける法然の影響力は大であつて、實際に社会に大きな影響を与へた宗教改革者は法然であつた。

法然の立教開宗當時は保元・平治の亂をはじめ頻発する天災地変による社会不安という時代そのものが全体として世紀末的気分が横溢していた時代である。此の様な時代に対する法然の処する態度は

世すでに末なり、人みな悪人なり（法然上人全集六八一頁）

仏道修行はよく身をはかり、時をはかるべきなり（法然上人全集四〇五頁）

凡諸下以是自力一出中生死上者不知時機分際故也（浄土全九ノ四五八頁）

と述べている故に、浄土教の教が特に罪惡深重の教々を対案とすると共に、又濁惡、無仙の末

世に相応する事を示しているのである。由來自から深くかゝり見に

こゝに教導がござはす。すでに戒定慧の三學の語にあはす。この三學の語は、我が心に  
相応する法門ありや、我身に堪えたる修行やある。(勅伝卷六)

と記している如く、眞實に自己の教導の道を體驗する事が出来る。久しく精神的放浪をした彼  
遂に聖道門に対する淨土門の易行なる事を覺り、承安五年に治尊の觀至疏の

一心專念ニ弥陀名号一行住坐臥不<sub>レ</sub>向<sub>ニ</sub>時節久近<sub>ニ</sub>依<sub>テ</sub>々不捨吾是名<sub>ニ</sub>正定之業<sub>ニ</sub>順彼<sub>ニ</sub>仏  
顯教 (淨全七ノ九)

の指南によつて、阿鉢陀仏本願の眞意を証得し、自己の實踐、精進すべき道が大經所説の如  
く八寶所誓の他力信心の一行にある事を體驗するや、ついに

わはこゝに身帽子もさざるあとこ也。十惡の法然房、惡痴の法然房がたゞ信心して往生せ  
ん。(淨然上人全集四五八)

と唱えたのである。法然は信心の教が特に五濁の世、無仏の時に相応する事を強調して、

理觀、菩提心、誦誦大衆、眞言止觀等、いづれも仏法のあろかにましますには非ず、みな生

死滅度の法なりとも、未だになりぬれば力あらず、行者の不法なるによりて機が及ばぬ

なり。(勅伝卷四十五卷)

と云つてゐる。法然のその根本態度は明に末法濁惡の時機分際をかえり見て、無智罪惡のわが  
身をはかりよくよく身のほどを知れという所にあつた。遂に衆生を一章に道徳の要義を  
引いて

是故大衆月教至云我末法時中億々衆生起<sub>レ</sub>行修<sub>レ</sub>道未<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>一人得者<sub>ニ</sub>。当今末法現是五濁

法然の末法觀について(森本)

法然の末法觀について(森本)

惡世唯有三淨土一門可通入路 (洋金七ノ三)

といつてゐる林に、いま末法下根の時機に於てはすべて難持難証の道を去つてむしろ「末法濁亂のときの教」(勸化ノ六)、「下根下智のともがらを器とする」(勸化ノ六卷)、「淨土の一般に帰依し念仏一門に依るべきを説いたのである」。

善人は善人ながら念仏し、惡人は惡人ながら念仏したづうき此のまゝに念仏すべし  
(勸化ノ二十一卷)

念仏にはまたく別の林なし、たゞ申せば極樂にまゐると知つて、心をいたして申せばまい  
る也 (法然上人全集四九二)

阿弥陀ほとけの本願は、末代のわがらが爲にあこし給える願ひは云々(法然上人全集六  
八二)

阿弥陀仏は惡業の家生をすくはんとために、生ずの大海に弘誓のふねをうかべ給へる也(法  
然上人全集六八三)

と述べてゐる林に、末代の濁亂の時代苦惱を痛感し、末代下下の時機に對して痛切さける又  
者、自覺を持ち、十惡の法然惡趣の法然と名かり末法下根のわが身をほかり、罪障深重の身の  
ほどを知つて、しかもその自覺をそのまゝに根本の立場としてすなはてこれに噴出してい  
ゆる時機相応し、機教又相應する亦陀弘願の教を發見し、これに架けてたやすく淨土に往生し  
末世の得脱を期したのが法然であつた。

無益のこの世をいのらんとて、大争の後世をわするる事は、さらに本意にあらず(法然上

人全集六九一)

という法然の言葉は彼の世界を端的に表明している。

聖道門の修行は智慧をさめめて、生死をはなれ、淨土門の修行は愚痴にかえりて、極樂に  
まゐる（勅信方四十九）

に依つても法然の末法觀が伺われるのである。又選要集に於て、時留此を止位百六の文の斷切

私向曰至唯云、時留此至止位百六、全不レ云、時留念仏止位百六、然今何云、時留念仏、  
哉、答曰此至所詮在、念仏、云々（勅信方六）

といつてゐる。即ち阿彌陀仏の教法はたゞ末法時代に於いてのみ、その存立の価値と意義とを  
持つというのではなく、否それ自体本来はむしろ時教を超越し、正像末の三時に通じて永遠の  
生命を持つものであると云うのである。法然は念仏大意に於て

末代惡世の衆生往生の心ざしをいたさむにおきては、又他のつとめあるべからず、只善導  
の釈につきて一向專修の念仏に入るべきなり（淨土九の五一〇）

といひ、念仏往生要義抄に於ては

はやく修しがたき教を學せんより、行じやすき弥陀の名号を唱えて、このたゞ生死の惑  
をいづべし（法然上人全集六八一）

と述べてゐる。これこそが法然の真解であり信條であつた。

かくして法然はいまや聖道門をすて、淨土門に歸したのであるが、余方余仏を去つてたゞ  
西方弥陀一仏に帰依し、弥陀の本願はたゞ林名念仏の一事をもつて、正しく衆生往生の道であ  
るとし、その余の一切の諸行に至つては勿論、本願の行にあらずといつて、持戒や菩提心の行



法然の末法観について（森本）

にを捨て、<sup>一</sup>本願にひとりだちさせてしとい、<sup>二</sup>ただ一向に念仏すべしと強調したのである。

要するに、法然の末法観は、時と機、即ち時代性と人間性に就いての反省に他ならなかったものであり、法然に依つて末法に即しつゝ、末法を超える道が念仏に依つて開かれたのである。即ち法然をして末法を超越せしめたものに他ならぬ本願の救いであつた。

（研究室員・四回生）